

---

# 美味しい紅茶とケーキの事情

ayu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美味しい紅茶とケーキの事情

### 【NZコード】

N4379R

### 【作者名】

a y u

### 【あらすじ】

彼女と僕の日常。すべての紅茶好きの皆様へ。

(前書き)

楽しんで頂ければ幸いです。

「あ、ねえ、お茶していかない？　こここの紅茶とケーキ、凄く美味しいんだって」

まだ少し風は冷たいけれど、降り注ぐ日の光は春のもの。小さな花に、小鳥のさえずり。気持ち良くなれた今日は、絶好のティート日和だ。

愛しい人と手をつないで歩いていて見つけたのは、以前、友人から教えて貰つたとびつきりの喫茶店。

つい最近仕入れた、素敵な情報だ。

ブラウンとオフホワイトを基調に作られた、カントリー風の落ち着いた店内。流れるのは軽やかなジャズか、優しく柔らかなクラシック。

ケーキは甘すぎず、フルーツをたっぷりと使った爽やかなものが多。甘いものが苦手だと言う人でも美味しく食べられるのが魅力だ。季節ごと、旬のフルーツを使ったタルトと、ビター・チョコレートとオレンジのケーキは特に最高。そして見た目も可愛らしく、見ているだけでも楽しくなる。紅茶はセイロンが極上。主張しそぎない、けれどしつかりとした香りと味はケーキの美味しさを引き立てる。紅茶を単品で楽しみたいならシャンパニュ・ロゼとディクサムが素晴らしい。甘い薔薇の香りとすつきりさわやかな味わいのシャンパニュ・ロゼは、ホットでもアイスでも。風味豊かなディクサムは、ちょっと高く着くけれどロイヤルミルクティーで飲むのがお勧め。茶葉の種類が分からなくとも、自分の好みを伝えればぴったりあつたものを用意してくれる言葉少ない初老のウェイターにも好感が持てる。

そんな素敵でお店の情報をくれたのは、茶葉の専門店で働く大親友だ。味覚も嗅覚も信頼できる友人からそんな素敵なお話を聞いたり、一度は試してみようと思うのはごく自然なことだろう。

そしてそれを、隣を歩く人と共有したいと思うのも同じ事。その相手が、愛しくてたまらない恋人であれば尚更だ。なのにその彼は、店に入るよりも早く家に帰りたいのだと黙つて顔をしかめる。

「また今度じや、駄目か？」

「せっかくお店の前まで来たんだもの、ちょっと寄つてみたいじゃない。ね？」

上田遣いで、おねだり。だけど彼は「えー」とか「でも」とか言って良しと言わない。

「……だめ？」

聞けば、「今度来た時にはおじつてやるから」とそう言って私の手を強く引く。そのまま歩きだした彼はかなり早足で、手を握られたままの私は軽く走るよつたな状態になつてしまつた。ああ、なんて我儘な人。私は軽く溜め息を吐いて呟いた。

「……今日は、」

ぼつりと、彼が呟いた。

「今日は朝からお前の淹れた紅茶かコーヒーが飲みたいと思つていで、一日の予定の中に『お前の紅茶かコーヒーを飲む』と言つのを組み込んで楽しみにしていて、その為に美味いって評判の店のケーキの用意もしていて、だから

早口に、ほとんど一息に言う彼を見上げれば、耳まで真っ赤に染まつていて、何だか、可笑しくて。不貞腐れたように唇を尖らせて、ちよつとだけ泣きそうな顔で、まるで小さな子どもみたい。そんな彼が、言葉を紡ぐ。

「だから今日は、あの店は、嫌だ」

「ああ、もう、可愛い人！」

\*

「あ、ねえ、お茶していかない？　ここの中の紅茶とケーキ、凄く美味しいんだって」

そう言つた彼女の言葉は、楽しげに弾んでいた。友人が茶葉の専門店で働きだしたとかで、彼女は最近紅茶にはまっているのだと言う。美味しい紅茶があるからと茶葉を何種類か貰つたらしく、凝り性の彼女は「この茶葉は蒸らし時間が～」とか「この紅茶に合うお菓子は～」とか、僕には良く分からない話をする。とは言え、彼女の淹れてくれるお茶が確実に美味しくなったのは事実で、彼女の家に行く度に出てくるお茶を楽しみにしているのも事実。それに『紅茶に詳しい彼女』なんて、ちょっとだけ、自慢だ。

彼女の淹れてくれるお茶は本当に美味しいんだ、なんて、半分ノロケながら話すのも楽しくて仕方がない。しかも、彼女はコーヒーを入れるのだけって上手いのだ。下手な喫茶店で出される飲み物よりも美味しいものが、彼女の家に行けばいつだって楽しめる。それなのに、どうして店に入るなどと言つ選択肢が必要なのか。

「また今度じや、駄目か？」

「せつかくお店の前まで来たんだもの、ちょっと寄つてみたいじゃない。ね？」

上目遣いで、おねだり。可愛い。けど、ケーキとか用意してあるんだよね。だけどそれを言つのも何だか変に恥かしい。

「……だめ？」

「今度来た時にはおひつてやるから」

そう言つても、彼女の頬は不服そうにぶくりと膨らむばかりだ。何だか悔しくて、強引にその手を引いた。気がつけば引きずるような形になってしまつて、慌てて少し、歩をゆるめる。

「今日は」

きつともう、正直に言つてしまわないと駄目だろ？。言わないと、僕はただのわがままできなり手を引っ張つたりする酷い男だ。ああ、もう、仕方がない。

「今日は朝からお前の淹れた紅茶かコーヒーが飲みたいと思つていて、一日の予定の中に『お前の紅茶かコーヒーを飲む』と言うのを組み込んで楽しみにしていて、その為に美味いって評判の店のケー

キの用意もしていて、だから

ああ、恥ずかしい。

顔が熱い。

顔を隠すように、彼女に僕の前を歩かせないような早さで進む。気付かないでいてくれよ、と僕は心中で呟いた。

「だから今日は、あの店は、嫌だ」

頼むから、正直に言つたんだから、嫌わないでくれ。

\*

「ん、美味しい」

チョコレートケーキをひとくち食べて、満足そうに呟く。僕はそんな彼女を眺めながら、紅茶をひとくち口に含んだ。美味しい。ダージリンという香り高い紅茶。今日は奮発してファーストフラッシュにしたのよ、などと彼女は言つけれど、そのファーストフラッシュとやらが何を指す言葉なのかが分からない。初摘みとか、そういう解釈で良いのだろうか。

とは言え、何やら良い茶葉を出してくれたのだろうと呟つ事は分かるので一言「ありがとうございます」と言つておく。彼女の紅茶は、今日も美味しい。

「美味しい？」

彼女の言葉に、僕は無言のまま頷いた。

「ほっぺ、クリームついてる」

指摘され、慌てて頬を拭つた。けれど彼女はにい、と口元を歪めて笑うだけ。

「うそよ、うそ」

くすくすと、楽しそうに笑う彼女はどこか満足げで、ざわついて笑われているのか分からぬ僕はちょっとだけ不機嫌になる。美味しい紅茶、美味しいケーキ、傍に居るのは愛しい恋人。なのによりと、嫌な気分。無意識に、唇がつんとどがる。

「貴方つて本当、ときどきす」「く可愛いわ」  
そんなこと言われても、僕は騙されないぞ。  
思つても、口元が緩むのを隠す事は出来なかつた。了

(後書き)

ルピシアって素敵。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4379r/>

---

美味しい紅茶とケーキの事情

2011年5月31日12時12分発行